

## 加藤副社長の急逝

1996（平成8）年にフィリピン進出を果たしたことはすでに述べた。駐在した加藤副社長があらゆる業務をこなせる人物だったからこそ、早い時期に海外進出を果たすことができたのだ。語学は堪能でなかったが、熱心な教育が奏功し、現地で精密金型ができるまでに1年とはかからなかった。操業から7年が経過し、ようやく利益が出るようになったのを機に、当時の工場から南へ50キロの経済特区に3000平方メートルの工場を建設することにした。



伊藤製作所社長

## 伊藤 澄夫 35



建設中のフィリピン第一工場

断。ただちに資本金の返却を求めてきた。告別式も終わっていないのに、「中国人はやはり金のことになると厳しいな」と思った一方で、「これで彼らと断。ただちに資本金の返却を求めてきた。告別式も終わっていないのに、とされた。前金を払う前に加藤副社長が逝去していたらフィリピンから撤退することになっただろうが、建設は予定

## わが人生最大のピンチ

通り進めることにした。

「次の駐在者を誰にするのか、ローカル社員は本当に合流してくれるのだろうか、1年近くも顧客に迷惑を掛ければ当社から離れていくのではなからうか、この事業が失敗に終わり、顧客や本社社員にまで迷惑をかけるのではないだろうか」。ドライバーのサミ

ーと建設現場を見学に行った時、とめどなく流れる涙で将来どころか目の前のものまでもがすすんで見えた。このようなピンチはもちろん初めて

だ。眠れない日も多く、5キロも痩せてしまった。私と睦田専務が2カ月間滞在した後、加藤氏の後任に、3年前にアメリカの大学を卒業した息子の童平と川崎営業課長、設計の渡邊次長、ペテラン技術者の立松氏の4人を指名した。改めて加藤氏がいかに1人で頑張っていたかが分かった。日本人不在の現地法人に急ぎよ駐在した彼らの苦勞は計り知れなかっただろう。

しかし、助ける神もいるものだ。7割の社員が移転を拒否したが、日系独資になったことを知り、全員が残ると言った話は第30話で述べた通りだ。実は息子を駐在させたことが私の本気度として彼らの気持ちを動かしたのだと思う。その後、こんにちまで順調に成長できたのは、この時抜擢した優秀な社員の苦勞があつてのことだ。